令和4年度港区保育の質の向上のための研究プロジェクト報告書

子どもの心を大切にする言葉かけ

はじめに

３年間に及ぶコロナ禍において保育者は、感染症対策に細心の注意を払い、子どものため、保護者のため、毎日、全力で保育に取り組む中で疲弊することも多かったことと思いますが、改めて保育のあり方を見直し、考える機会にもなったことと思います。

港区は、令和４年度に、子どもへの理解を深め、より一層保育の質を高めるため、保育者が日々の保育の実践を通じて研究するチーム「保育の質の向上のための研究プロジェクト」を立ち上げました。

港区ならではの質の高い保育を実現するためには、保育者が主体的に実践研究を積み重ね、専門職としての資質を向上することが重要です。

令和４年度は「子どもの心を大切にする言葉かけ」をテーマに、子どもの最善の利益を第一に考え、自己肯定感を育む関わりについて、保育者同士で実践と考察、検討を重ねてまいりました。子どもの気持ちを大切にすると子どものつぶやきを見逃さないなど、新たな気づきと共に、他の保育者の良さに気づき、自分の保育を振り返ることができ成長を感じられる研究となりました。

区は、令和５年４月からのこども基本法施行を契機に、これまで以上に子どもの視点に立ったきめ細かな施策に取り組む中で、保育者が意欲を持って働ける魅力ある環境整備においても取り組んでまいります。

来年度は、私立保育園に本研究に参加していただき、公私立保育園が共に、保育者として互いに育ち合う仲間となって、未来を担う子どもたちの健やかな育ちを支えていけるよう、引き続き研究の充実を図っていくことを心より期待しております。

結びに、研究プロジェクトのアドバイザーとしてご協力を賜りました聖徳大学教授阿部真美子先生に厚く御礼申し上げます。

子ども家庭支援部長　中島　博子

目　　次

1　保育の質の向上のための研究プロジェクトの主旨　・・・・・・・・1

2　令和４年度　本研究の目的（ねらい）　・・・・・・・・・・・・・・1

3　研究の方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

4　研究計画　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

5　事例研究の報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

6　区立保育園　保育観察報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６

7　私たちが大切にしたい事　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１９

8　保育の質の向上プロジェクト　参加者の感想　・・・・・・・・・・２１

9　おわりに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２２

１　保育の質の向上のための研究プロジェクトの主旨

区は、平成３１年４月には待機児童ゼロを達成し、以降、各年度４月時点での待機児童ゼロを継続している。一定の「保育の量」が確保されたいま、さらなる質の高い保育を目指して、令和４年度より「保育士向けの研修の充実」に取り組んでいる。その一環として、令和４年度５月に区立保育園１５園の中堅職員（勤務歴５年目から１６年目）１５名を中心に研究グループを立ち上げ、保育の実践的な力を身につけ保育の質の向上を目指す研究に取り組み始めた。

２　令和４年度　本研究の目的（ねらい）

（１）事例研究

保育する上で不可欠である保育者による子どもへの「言葉かけ」に着目し、本研究のテーマを「子どものこころを大切にする言葉かけ」とした。研究グループメンバー自身の保育から事例を抽出し、保育の中での言葉かけが子どもの成長発達にどのような影響を与えているのか、言葉かけを振り返ることで保育者の意識や保育の質は変わってくるのか等を、実践と検証を繰り返して研究する。

（２）保育観察による研究

言葉かけに注目し、保育観察を行う。観察から、保育者による言葉かけの良い点、気になる点、今後の課題等を考察する。

３　研究の方法

（１）　事例研究

研究グループメンバー１５名を３つのグループに分け、各自抽出した事例についてグループ内で意見交換を行うこととした。

①　事例収集期間および事例数

令和４年５月から１０月の６か月間。

毎月２事例（５月のみ１事例）を収集し、記録用紙（表 1）に記録をする。

総事例数　１６５事例（１１事例×１５名）。

②　研究対象年齢

各グループの事例研究対象年齢は、次のとおりである。

１グループ	０、１歳クラス
２グループ	２、３歳クラス
３グループ	４歳クラス

表１

言葉かけの記録
・具体的な姿やことばかけと、子どもの反応の関係性に着眼して、簡潔に記述をしましょう。
・考察は、子どもへの働きかけについて振り返り、考えてみましょう
・自分だけの課題にとどめず、職員間で意見交換を行い記録に役立てましょう

〇〇保育園
名前:　　（〇グループ）

記録日	場面	対象児、背景	【ねらい】こどもと保育士のことば	考察
月 ①			【　ねらい　】	
②			【　ねらい　】	
月 ③			【　ねらい　】	
④			【　ねらい　】	

（２）　保育観察による研究

①　観察方法

対象園へ訪問し、「子どもへの言葉かけの観察ポイント」（表２）を使用した観察および保育士と子どものやりとりを記録する。

②　期間・観察対象園

令和４年１１月から１月。時間は９時３０分から１２時頃とする。

日程	観察園	日程	観察園
１１月２日	南青山保育園	１１月２８日	白金保育園
１１月９日	西麻布保育園	１２月１６日	麻布保育園
１１月１０日	赤坂保育園	１２月２１日	芝公園保育園
１１月１１日	本村保育園	１月１２日	こうなん保育園
１１月１５日	青山保育園	１月２３日	飯倉保育園
１１月１６日	高輪保育園	１月２４日	伊皿子坂保育園
１１月１７日	芝保育園	１月２７日	南麻布保育園
１１月２１日	台場保育園		

③　観察者

研究プロジェクトメンバー１５名のうち、飯倉保育園、南麻布保育園、伊皿子坂保育園の３名が観察者となった。

表２　保育観察記録のポイント

記録者：

観察日時：

保育園　：　　保育園　　歳クラス

子どもへの言葉かけの観察ポイント（観察でできているところをチェックしてください。）

○子どもの気持ちを受け止めて言葉をかけているか（応答的な関わり）　□

○子どもの自発性を大切にしているか　□

○自分で気づけるような言葉かけをしているか　□

○子どもに具体的な言葉かけをしているか　□

○子どもに丁寧な言葉かけをしているか　□

○個人差を配慮した言葉かけをしているか　□

○子どもの自己肯定感が高まるような具体的なほめ方（認め方）をしているか　□

○子どもの言葉を先取りせず、「なあに」という気持ちを向けて待ってあげているか　□

○強制的な言葉をつかっていないか（～しなさいのような命令系の言葉）　□

○否定的な言葉を使っていないか　□

○子どもの行動に対して、急かした言葉かけをしていないか　□

○声の大きさを状況によって変えているか　□

○声かけ、言葉かけが多くないか　□

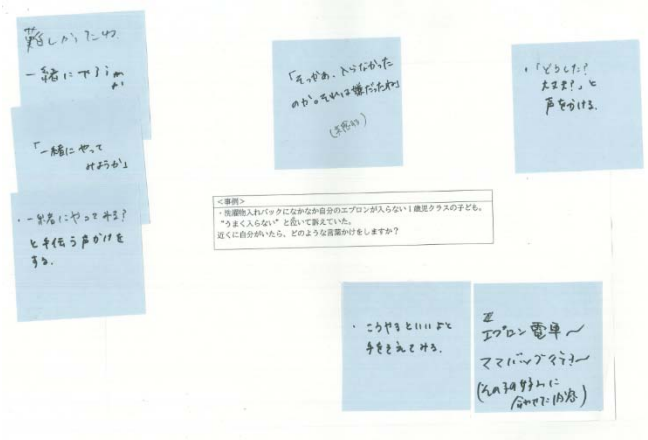
→　全体や個々に応じて、次の行動を知らせるときに保育士が何回言葉をかけていますか？
例）外遊びから帰ったときにトイレに行くように促す場面等

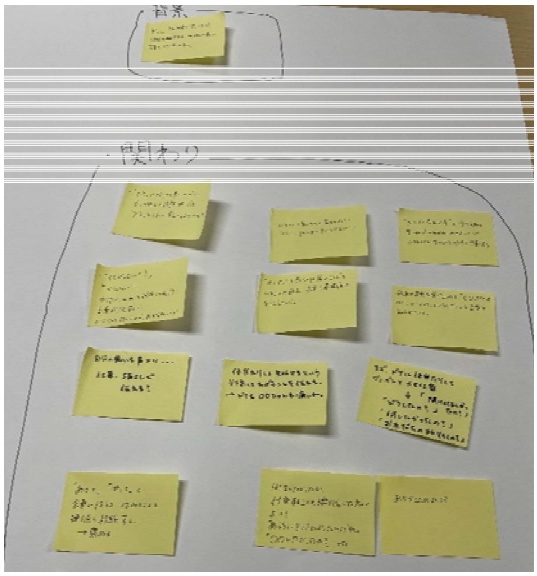
４　研究計画

令和４年５月１７日第１回研究プロジェクトを開催し、令和５年１月１０日までの期間、約２か月に１回、計６回のプロジェクトでの事例報告・意見交換を経て、本報告書を取りまとめた。

日程	研究の計画及び内容	その他
Ｒ４．５月１７日	第１回研究プロジェクト 研究テーマ決定、確認 研究の目的の設定、研究の方法の確認 各園で事例収集（５月～１０月）	
７月　５日	第２回研究プロジェクト 各事例報告、意見交換	
９月　５日	第３回研究プロジェクト 各事例報告、 意見交換・付箋ワーク（写真１）	
１１月　８日	第４回研究プロジェクト 各事例報告、保育観察報告 意見交換・付箋ワーク（写真１）	区立園にて保育観察実施
１２月　６日	第５回研究プロジェクト 保育観察報告、まとめのワークショップ	
Ｒ５．１月１０日	第６回研究プロジェクト 研究を振り返って（まとめ） 報告書・ポスター作成作業	

写真１　付箋ワーク





事例やテーマに対し、「こんな時、自分だったらどんな言葉かけをするか」等、自分の意見を付箋に書き出して共有した。短時間でいろいろな意見を出しあい、整理することができた。

５　事例研究の報告

１歳児の育ちと言葉かけ
～イヤを受け止め、心の安定を図る関わり～

場面と事例

対象児 ： 1歳児クラス（1歳8か月児　女児A）

・食事ペースはゆっくりだが、食べることは嫌いではない。
・イヤイヤが出てきており、納得いかないことがあると「やだ」「きらい」と言う
・日中機嫌よく過ごしていたが、食事前に転んで機嫌が悪くなる。

食事前、「やだ」と言い自分の席に座りたくないと表現するＡ。「じゃあせんせいのおひざでたべる？」と提案すると「うん」と言いうなずき、保育者の膝に座って食べ始める。少し食べたところで、「せんせいみんなのおしぼりもってきていい？」と聞くと「うん」と答えたため、「じゃあ、いすにすわってたべてて」と伝えると、イスに座って食べ始める。おしぼりを取り、本児の横に座り、「Ａちゃん、ごはんおいしい？」と話しかけると「うん！」と言い笑顔を見せ、そのままイスに座って食べている。

結果

・提案し、本児の同意を得て、気持ちを尊重しながら関わることが大切だと感じた。
・無理に保育者の意見を通すのではなく、本児の様子を見ながら関わっている。
・イスに座って終わりではなく、そのあとも気にかけて言葉がけをしたことが、心の安定に繋がっていったのではないか。
・ちゃんと見てくれる保育者がいると感じたことで切り替わっていったのではないか。
・「やだ」という言葉に対し、否定的な言葉は一切使わなかった。

考察

・１歳児保育としてゆったりと・楽しい雰囲気で食事をすすめることを意識しているため、本児に対しても丁寧な関わりが出来た。保育者自身が余裕をもって関われる環境作りも大切である。
・個々の子どもの特性や性格を考慮して、個別の言葉がけ、関わりをしていくことが大切である。
・子どもの心情を理解しようとし、受容する気持ちを持つことで、自ずと否定語は減っていくのではないかと思う。

１歳児の育ちと言葉かけ
～“今”を受け止める言葉かけ～

場面と事例

対象児 ： 1歳児クラス（2歳0カ月　男児A）

・パーソナルスペースがかなり広く、友だちが近くに来ただけで「だめ」と噛んだり押したりする。

・おむつ替えの際、毎回、飛行機で気分が乗るわけではなく、毎回、言葉がけを変えながら誘っている。

・戸外遊びもあまり興味を感じないようで、「お外に行こう」と誘っても「やだ」と言う。

保育者が「Ａくん、オムツをかえようか」と声をかけると「やだ」「だめ」と声を上げ、オムツを変えるのを嫌がる姿が見られた。「じゃあ、もうすこしじかんがたってからかえようか」と声をかけて他児のオムツを替え、再び声をかけたが、最初に声をかけた時と同じリアクションだった。「じゃあ、ひこうきにのっていこうか」と声をかけて横抱きにすると気分が変わった。

結果

・子どもに承諾や選択肢を与える言葉がけを行うことで、最終的には嫌がることなくおむつ替えに向かうことが出来た点は良かった。

・遊びが中断されたり、発達段階としてイヤイヤ期が重なっていたりと色々な要因が挙げられる。本児に関わらず子どもの状況を見て、場所を変えたり人を変えたり、興味が持てるようにその時の子どもにあった言葉がけをすることが大切である。

考察

・発達の段階として、何に対しても嫌だという感情が生まれていると感じるので、その時の状況に合わせた言葉がけ（イヤイヤの気持ちを受容する言葉がけや態度など）を工夫する必要がある。

・「もう少し経ってから変えようか？」という言葉がけの後に再び声をかけても同じ反応であったことから、１回目の言葉がけは、この時は本児にとって有効的ではなかったが、時間を置いたことで気持ちに多少の変化はあったかもしれない。

・今回は、本児の好きなもの「乗り物」を使うことで、気持ちが切り替わりおむつ替えを行えたが、言葉がけ以外にも環境（例えばおむつ替えスペースに乗り物の壁面がある等）に魅力的な何かがあると変化が生まれるのではないだろうか。

１歳児の育ちと言葉かけ

～「やってみよう」から「一緒にやってみる？」～

場面と事例

対象児 ： 1歳児クラス（2歳1か月 男児A。5歳児クラスに兄がいる。）

・生活面も以前は保育者に促されると、自分で着脱を行おうとしていた。

・しばらくズボンの着脱を誘うと「できない」と拒否したり、嫌がったりする姿が続いている。

・着脱を保育者と一緒にしている時、片方のズボンの裾に両足が入ってしまい、思い通りにいかないことに怒っている。絵本の人魚に興味を持っている。

① 今まで「やってみようよ」と誘っていた言葉がけを、はじめから「せんせいといっしょにやる？」「てつだってもいい？」と言葉がけを変えて誘いかけると「うん、いいよ。せんせいとやる。」と落ち着き、一緒に手伝ってもらいながら履いている。

② 「にんぎょさんみたいでかわいいね。でもＡは２つのあんよで走るから、もうひとつのあんよはこっちだね。」と指をさし、足を持って知らせると「にんぎょさん？♪」と気持ちを切り替えている。その後は「Ａくん（じぶん）にんぎょじゃないよ♪」と楽しくズボンの着脱に取り組んでいる。

結果

・子どもの姿・様子をしっかりとみて、言葉がけを変えていけたのはよかった。

・「ちがうよ」など否定的な言葉を使うことをせず、やろうとする姿を認めて意欲に繋げていった。

・足が同じ所に入ってしまったことを人魚に例え、上手くいかなかったことも笑いに変え、楽しい雰囲気を作ったのがよかった。

考察

・自分で出来ることが少しずつ増え“やりたいが上手くいかない”という葛藤している姿を捉え「一緒に」「手伝っていい？」など本児の思いに寄り添った言葉がけを行った。そのことで、本児の心が満たされ納得して行動に移れたのではないか。“自分でできるが、やってほしい”という姿は１、２歳児でよく見られる姿であるが、保育者の思いが先行し、自分でやるよう促す言葉がけが多くなりがちになるため気をつけていきたい。

・出来る、出来ないではなく、応答的な関わりの中で“自分でやってみよう”と、思える言葉がけを大切にしていきたい。

2歳児の育ちと言葉かけ
～1 人ひとりに向けた言葉かけ～

場面と事例

対象児 ： 2歳児クラス（2歳11か月児） 男児A

・新担任との関わりの場面

・新しい環境に慣れるのに時間がかかり、情緒に波があった。持ち上がり担任と過ごすことが多かったが、少しずつ新担任と関わろうとする姿が出てきていた

戸外遊びに出掛ける際、帽子をうまくかぶれない男児Ａ。「せんせい、ぼうしかぶって！（かぶせて）」と毎日やってもらおうとしていた。保育者が「ここをもってごらん。」「あたまにのせてごらん。」と手を添えて知らせても、できるようにならなかった。

ある日、黄色帽子の日よけの部分を２か所持つよう、手を添えて手伝い「ちょうちょさん、パタパタ～。あ！あたまにのっかった！」と遊びながらかぶるよう、誘ってみた。楽しみながら理解し、うまく頭にのせられていた。「ちょうちょさんパタパタ～って（日よけを持ちながら）かぶるんだよね？」とＡ自身も達成感が味わえているようだった。

結果

その後、戸外に出る際には「ここ（日よけの部分２か所を）もって…」「“ちょうちょさんパタパタ～”ってやるんだよね？」「あ！あたまにくっついた！」と、Ａから新担任に意欲的に関わるようになった。

また、別の生活の場面や遊びの中で、持ち上がり担任にこだわることなく、新担任にも甘えたり、手伝いを求めたりすることが増えていった。

考察

“その子にとってどんな言葉が合うのか”を考える姿勢が子どもにも伝わり、気持ちが通ったのだと思う。

特に新年度当初は、集団よりも１人ひとりに向けた言葉かけを、より意識する必要があると感じた。愛着関係構築のきっかけになった。

子どもに馴染みのある言葉（興味を引き出す言葉）で伝えることで、やり方を理解しながら楽しく行えるようになった。子どもの理解度がこんなにも変わるのだという気付きにもなった。

2歳児の育ちと言葉かけ
～子どものイメージに添った言葉かけ～

場面と事例

対象児 ： 2歳児クラス10名程度（月齢も様々）
・紙芝居などの物語や体操などから、忍者に対する興味や共通のイメージをクラスの中で持ち始めていた

室内遊びの際、全体的に興奮気味で各々が遊んでいる。分かれて過ごすため片づけをして集まる。「きょうはひさしぶりに〇〇しつへあそびにいこうとおもいます！おもうんだけど（急に声量を落とし）、さっき、そこのろうかに、わるいにんじゃがいるってはなしをきいて、みんなが、つれてかれちゃうかもしれなくて・・・」と話すと、「だいじょうぶ、そ～っといけばみつからないよ（小声）」と１人が言って、忍び足で歩いて別室へ向かった。

結果

保育者の声かけに反応した最初の子の姿を真似して他の子も忍び足になり、皆で忍者になりきりながら別室へ向かう。別の日でも「きょうもこわいにんじゃ、いるかも…」という子どもからの発信があり、行き帰りの移動は忍者ごっこを楽しんだ。

考察

絵本や紙芝居などの物語に親しみ、段々と子どもなりにイメージが浮かぶようになってきたこともあり、身近なものや関心のある出来事に関連付けて声かけをしたところ、うまく結びついた。

普段から様々な物語に触れたり、子ども自身の体験を話題にやり取りしたりすることを重ねたことで、２歳児ならではのイメージの世界を楽しんだ主体的な姿を引き出せた。

2歳児の育ちと言葉かけ
～仲の良い友だちに聞いてみる～

場面と事例

対象児 ： 2歳児クラス（2歳10カ月 女児A）

・身の回りの事を自分からやろうとする

・保育士に手伝われることはあまり好きではない

着替えの時、Ａは保護者がセットしていた洋服が自分の着たい洋服ではなかったようで、「これじゃない」と訴える。「かわいいとおもうよ」と保育者が言うと、「かわいくない」と言って衣類ケースに洋服を探しに行く。保育者がＴシャツを並べて「どれにする？」と問うが、「やだ・・」と答える。仲の良い友だちＢを呼び「〇〇ちゃんのふく、どれがいいとおもう？」と聞く。Ｂが選んだものを「これにする」と選ぶことが出来た。

結果

その後も好きな洋服がセットされていないと、洋服を取り換えに行ったり、気の合う友だちに選んでもらったりしている。

補充されている洋服が少ない日もあり、セットされていた洋服を着ざるを得ないときもあったが、保育者と友だちが「かわいいよ」というと、納得して着るようになっている。

考察

保育者の言葉かけよりも友だちに言われることで納得することが増えている。

視野が広がり、保育者との関係から友だちとの関わりが増えてきたからこそ、成立したやりとりだと感じた。

2歳児の育ちと言葉かけ

～待つ(声かけをして少なくして見守る)～

場面と事例

対象児 ： 2歳児クラス(3歳5カ月児 男児A)

・次の活動などへの切り替えが苦手

・都合が悪くなると保育者の話を聞こえないふりをする

外遊びから戻ってきて、テラスで靴下や帽子を脱いでいるときに、なかなか取り掛かれずにいる。隣の児童遊園で幼児クラスが運動会の練習をしていたため、その様子が気になるようだった。

着脱などは、毎日の繰り返しのことで何をやるべきなのかはクラスの子どもたちを含めAも分かっていることなので、特に声をかけずに見守っている。

結果

しばらく運動会の練習の様子を見たことで、Aの中で納得し、自分から着替えに取り掛かっていた。

日頃から身の回りのことは取り掛かるまでに時間がかかる子どもであるため、Aの気持ちを受け止めながら関わることで、自分から気持ちが切り替えられるようになっている。

考察

職員間で“最低限の声かけをして、待つ”という共通認識を持つことがよかったのだと感じた。

Aの性格上、声をかけられるとさらに意欲がなくなってしまうことがあるので、“一緒にやってみる”よりは“待つ”ことが合っているのだと考えた。

クラスのねらいや子どもの性格を踏まえたうえで、どこまで待つのかという線引きも必要である。

４歳児の育ちと言葉かけ
～子どもが考える姿を最後まで見守る～

場面と事例

対象児：４歳児クラス（5歳6か月　男児A、5歳3か月　男児B）
・かるた遊びをしている場面。B は、普段から自分の気持ちを言葉にして相手に伝えることが苦手。

（前日のやりとり：男児Ａと男児Ｂと数名がかるたをした際、カードの取り合いでＡが、「Ｂがずるをした」と言い、Ｂが大泣きをし怒った。Ｂとしては自分の方が、とるのが少し早かったと思っている様子。その日は別の担任がそばでじっくり話を聞き、かるた遊びには戻らずに終わっていた。）

朝登園してきたＢがかるたを広げると、「いれて」とＡが入る。Ｂは読み手も兼任しながら進めている。すると、一枚のカードを２人同時にタッチし、昨日と同様の場面になる。保育者は言葉をかけず、そばで様子を見ていると、Ｂが「これはじゃんけんかな」と提案してじゃんけんを始めた。負けてしまったが、「ああ、ざんねん」と言い、次を読み始めた。Ｂが自分なりに昨日の出来事からどうしたらよいかを考えていたことが分かったので、「じゃんけん、よいかんがえだね！」と言葉をかけた。Ｂは笑っている。

結果

・事例の前日と当日とで、子どもに関わった職員は違うが、男児達の様子を共有したことで、今回のように様子を最後まで見守った上での言葉がけができた。
・良い事もそうでないことも情報を共有しておくことが大切である。

・Ｂの考える様子を見守るだけではなく、（前日の様子について）ＡとＢの気持ちを伝え合う場があると良かったのではないか。
→この場面ではＡにも「どうしたの？」と個別に話を聞いていた。Ｂが気持ちを立て直せずに泣いていたため、双方に話を聞くにとどまっていた。

考察

・お互いに思っていたことを話さないと、もしかしたら保育者が思った事とは違う風に感じているかもしれない。
・お互いの気持ちを言葉にして伝え合うことで、相手の気持ちを知る、感じることができる。双方の気持ちを伝え合うことは必要である。
【今後に繋げるには】
・担任が見ていない時に、子ども同士のぶつかり合いが起こることもある。そんな時には、“双方に話を聞いて伝え合う場を作る”、“周りで遊んでいた子に状況を聞いてみる”、「困ったね。どうしようか」と言葉をかけ、“子ども達自身で考えられるようにしていく”等の方法で関わっていき、子どもがやりとりや自分の気持ちを整理できるようにしていくと良いと考える。

4歳児の育ちと言葉かけ
～共感と、次に向けての言葉がけ～

場面と事例

対象児 ： 4歳児クラス（4 歳 6 か月　男児A）
・4歳児クラス20名で　転がしドッジボールで遊んでいる場面

転がしドッジボールで負けてしまった際に他児に「ずるをした」と怒って手が出てしまったり、部屋から出て行ってしまったりする男児Ａ。保育者が「つらかったね」「くやしかったね」とＡの気持ちを受け止めてから、「おともだちは、ずるをしていたわけじゃなかったんだよ」等、客観的状況を知らせる。

その後、「さくせんかいぎをしよう」と誘い、どうやったらボールに当たらずに動けるのか、一緒に考え、思いついたことを紙にイラストとともに書いていった。まずは保育者がいくつかコツを伝えると、子ども達の方からもアイデアが出てきた。

翌日、再び本児は負けてしまったが、他児のせいにするのではなく、自分からホールの隅へ行き、気持ちを落ち着かせると、保育者の元へ来て、「さくせんかいぎをしよう」と誘う姿が見られた。また、ドッジボールをする前には必ず作戦会議の紙を確認してから参加する姿が見られるようになった。

結果

・本児の気持ちに共感し、客観的な状況を伝え、自分から気持ちが切り替わるのを見守った。

・“さくせんかいぎ”というワクワクする言葉をきっかけに、やってみようという気持ちを引き出せたのではないか。また、いくつかのコツを伝えたことで、子ども達の中でもイメージが出てきて、自分で考えようとする姿に繋がったと感じる。

・作戦会議の内容を紙に書いたことで、継続して楽しんでいる様子がある。紙に書いたことで、子ども達にとってより分かりやすく、共通のイメージを持つことができた。

・「負けたからもうやりたくない」という姿はある。悔しい気持ちを出し、切り替えて次に向かっていける方法、かかわりが必要となってくると感じる。

考察

・「負けると嫌だから…」「失敗したくないから…」と先のことが想像できるようになっているからこそ、このような姿が出てくる。その場合は次のような点を意識することで、子どもの姿に変化がみられるのではないかと考える。

①気持ちに寄り添う

②伝え合う＝認め合う

子ども同士で友達の素敵だったところや頑張っていたところを伝え合う場を作ることで認められたという自信になっていく。

③次に向けての声かけをする

作戦会議や遊び方のコツをみんなで考えてみる。

→「次はこうしてみよう」と意欲に繋がっていく。

4歳児の育ちと言葉かけ
～子どもを繋ぐ言葉かけ～

場面と事例

対象児 ： 4歳児クラス　18 名
・散歩先でダンゴムシがたくさんいる場所を見つける。そこを“ダンゴムシの国”“ダンゴムシ部屋”と呼ぶ。次の散歩の時、「そこにいきたい」と子ども達から挙がる。

５月２５日楽しみにしていた場所へ行き、散歩バックにたくさんのダンゴムシを捕まえて帰園。虫かごに入れて観察していた。昼食前、みんなで「捕まえたダンゴムシをどうするか」を話し合う時間を作る。

保「つまえたダンゴムシ、このあとどうする？」、Ａ「かんさつする」、保「むしかごにいれてかんさつしてたね。そのあとは？」、Ｂ「つちにかえす」、保「どこのつちにかえす？えんていのかだんのつち？」、Ｃ「つかまえたところにかえす」、保「なんでそこがいいとおもった？」、Ｄ「そこになかまがいるから」「つかまえたら、もとのところにかえそう」と話が進む。その後の散歩では、ダンゴムシなど生き物を捕まえると、観察した後、元の場所に戻す姿が出てきている。

結果

・これまではダンゴムシを見つけ、捕まえることで満足し、バケツの中で動かなくなってしまっていることが多かった。みんなが捕まえてきた日に、みんなで考えるきっかけを作ったことで、ダンゴムシを自分たちに置き換えて考える姿があった。また、大人が「こうしよう」と決めたのではなく、自分達で決めたということが、その後の姿に繋がっていったと思う。
・子ども達の考えに、保育者が「なんで〇〇がいいと思った？」と聞いたことで、さらに考えが深まっていくと感じた。
・子ども一人一人の発言に共感していくことで、“認められた”という気持ちになるのではないか。

考察

・クラスでの話し合いの時には、子ども一人ひとりの言葉の理解力は違うので、内容を分かりやすく伝える工夫が必要である。
・みんなで決めたことが、その状況になった時に行えない姿も出てくるだろう。そんな時には、その子の気持ちを受け止め、どうしていくか一緒に考え、次に繋げていけるような関わりが必要と考える。

クラスの中や身のまわりで起きたことなど、みんなで「どう思うか」「どうしたらいいか」考える機会を継続して作っていき、積み重ねが、子ども同士の話し合いに繋がっていけばと思う。

4歳児の育ちと言葉かけ

～異年齢児を繋ぐ言葉かけ～

場面と事例

対象児 ：４ 歳児クラス（5歳4か月　男児A）、5歳児クラス（男児B、C、D）
・年長児の紙飛行機に興味を持ち、「ぼくも作りたい」と言っている場面

自分で作った紙飛行機を５歳児Ｂ、Ｃ、Ｄの３名がホールで“紙飛行機飛ばし対決”をして遊んでいた。３人のよく飛ぶ紙飛行機を見て、Ａは自分で作り始める。しかしうまく折れず、保育者に「よくとぶひこうきがつくりたいんだ」と伝えに来る。保「よくとぶひこうきかぁ、それじゃあ、らいおんぐみさんにおしえてもらおうよ」と、一緒に５歳児３名の所へ行き、「おしえて」と伝える。Ｂは快く「いいよ」と返答。Ａが持っていた紙を見て、「これじゃなくてツルツルのかみ(広告紙)のほうがよくとぶんだよ」と、どんな紙で作ったらいいのかも教えてくれ、Ａの目の前で折り始める。ＡはＢの折り方を見て、「じょうずだね」と言っていた。出来上がると、年長児と一緒に紙飛行機を飛ばし楽しんでいた。５歳児の飛ばし方を真似したり、一緒に紙飛行機対決をしたり、一緒に遊ぶ姿が出てきている。

結果

Ｂに折り方を教えてもらう中で、Ａはコツを知り、年上の友達Ｂの優しさを感じていた。また、よく飛ぶ飛行機が作れるＢに憧れも感じていた。作れた喜びから、その後の遊びが充実し、楽しくなっていったと考えられる。

その後、４歳児クラスの中でも、紙飛行機の遊びが広がってくる。Ａは自分で折れるようになり、クラスの友達に教えてあげる姿も見られるようになった。

考察

“よく飛ぶ紙飛行機が作りたい”というＡの思いと、“いろいろな友達と関わってほしい”という保育者の願いが実現できるよう、年上の友達に教えてもらえるように橋渡しした。コロナ渦で異年齢のかかわりが減っているが、保育者がきっかけを作り、繋げていくことで、いろいろな友達との関わりや遊びが広がっていくことを感じた。

６　区立保育園　保育観察報告

令和４年１１月から令和５年１月の３カ月間で、１５園の保育観察を行った。その結果、各園の保育者の保育の中での言葉かけや配慮から感じ取れた気づきを、以下の７点にまとめた。

気付き、感じたこと

１　子どもの思いを尊重する（決めつけない）

・子どもの思いを決めつけずに「やっていい？」「使っていい？」と確認しながら物を使ったり、手伝ったりしていた。先入観で「〇〇だろう」と予測するのは良いが、決めつけにならないことはとても大切と感じた。

・その子の思いを受け止め、言葉をかけ、その姿を最後まで見守っていく（言葉をかけていく）ことの大切さ。全員の姿を完璧に見守ることはできない難しさを感じるが、その子の思いにまずは耳を傾けることを、保育の中で大切にしていきたい。

２　見守り

・夢中で遊んでいる子どもに対しては余計な言葉をかけずに見守る保育をしていた。様子を確認しながらも、近くで見守っていた。遊び込んでいる姿は大切にしていきたいと思った。

・子ども自身が”気づく“まで少し見守ることや、“考えられる”ような言葉かけが多かった。保育者のこのような姿勢やか関わりが、子ども達の“考える力”を育んでいくと感じた。

・室内でも、園庭でも子ども達の声がよく聞こえてきた。子ども達が好きな遊びをじっくり楽しんでいる姿、友だちや保育者とやりとりしながら遊ぶ楽しそうな声、時々友だちと自分の考え、気持ちを主張し合う声、転んでしまい泣いている声など、いろいろな声が聞こえ、様子が見られた。保育者が子どもたちの姿を見守りながら（乳児クラスは一緒に遊びながら）、声を掛ける時には“そばに行き、声を掛ける”ことが、職員一人ひとりの意識の中にあることを感じた。

３　声の大きさ・トーン・言葉かけの数

・クラスの雰囲気がとても穏やかで、子ども達も落ち着いていた。言葉かけも、声のトーンが抑え気味で優しい言葉かけが多く見られた。子どもに対してだけでなく、大人同士の言葉のかけ合いでの言葉遣いや口調などで、その場の雰囲気が変わると感じた。

・遊びから片付けに切り替える時、そっけない言葉かけになりやすかったり、子どもの気持ちをきちんと受け止めにくかったりする。遊びを中断させるのではなく、楽しく帰られるような言葉かけを工夫したり穏やかな口調（言葉遣い）を使ってみたりすることでスムーズに行動に移れることを感じた。“安心できる声のトーン”というものがあるのだということも勉強になった。

・着替えの場面では、穏やかな口調で言葉をかけており、一人ひとりのペースに合わせて、落ち着いた空間で着替えを行えていたことがとてもよかった。（遊びとのスペースと分けられていた。）
一方で、“意欲的にさせるための言葉かけ”が多いと感じる時もあり、声の大きさなど保育者が意識することも必要だと思った。

４　次に繋がる言葉かけ

・「〇〇するんだよ」「〇〇しなさい」ではなく、「〇〇した方がいいよ」という言葉かけが何度か聞かれた。１歳クラスだが、最終決定は子どもがすることが必要と思うため、良い言葉かけだと感じた。
・なかなかトイレに座ろうとしない男児 2 名に対して「座ってトイレしようね」とただやるべきことをくり返し言葉がけしていた。「トイレが終わったらホールに行って楽しいことをするみたいだよ！」「〇〇くんと〇〇くんどっちが上手かな？」など、やりたいと思えるような言葉の工夫が必要と感じた。

５　常勤職員と会計年度職員の言葉かけの差

・子どもに次の行動を伝える時、常勤職員は言葉かけが全体に向けての一回だけだったが、会計年度職員は個人に対して複数回言葉かけをする場面があった。港区の保育の質をあげるという観点では、会計年度職員も常勤職員と同じように言葉かけを大切にしていくことが必要と思うが、現状難しいとも感じている。
・会計年度職員によっては、ほとんど言葉をかけない、また 言葉かけが多い人もいた。

6　子どもの思いに耳を傾ける

・5 歳児クラスの劇遊びの様子では、“みんなで劇を作ろう”という気持ちが伺えた。保育者は、子どもから出てきた気づきや考えなどを丁寧に拾い、やりとりしながら劇遊びを進めていた。ほめ方、認め方の声かけのタイミング、言い方などとても勉強になった。子どもの声や言葉に耳を傾け、一人ひとりの思いを考える（理解する）、感じながら保育していくことが大事だと改めて感じた。

7　大人同士の言葉のやりとり

・子どもへも大人へも、①次は何をするのか②どのようにするのかを分かりやすく伝えることが円滑なクラス運営にも繋がると感じた。自分自身も伝え方や声のトーンを意識していきたいと思った。

考察、課題

〈保育観察を通じて感じたこと〉

・年齢に関わらず、常に子どもの気持ちを尊重することで、言葉かけが変わってくる。

・子どもに対してだけではなく、大人同士の会話も声のトーンや口調に気を付けることで、その場の雰囲気が変わってくる。特に現在保育者の虐待について、保護者も敏感になって気にしていることが多いため、意識していくと良いと感じた。

・先入観を持たず、様々な保育者の保育を見る機会はとても貴重なものとなった。参考になる言葉かけや、保育の進め方を学べたため、すぐに実践に活かしていく。

・他園を観察することで、言葉かけの多さや声の大きさ、癖など自分自身の言葉かけを振り返ることができ、少しずつだが改善していけるきっかけになった。幼児クラス担任としては、“子ども達からの思いや考えを聞くことの大切さ”を感じ、特に反省した。

・保育観察を通して、いろいろな保育者の保育を見ることで、気づいたこと、感じたこと、学んだことがたくさんあった。こんなやり方があるのかという学びや真似したていきたい関わりなどいろいろな人の保育観に触れ、自分の保育の幅が広がっていくと感じた。また、自分の保育を見直す機会になり、保育を深められたと感じた。

〈今後の課題〉

・会計年度職員の言葉かけについては、個人ではなく園として取り組んでいけると良いと考える。常勤職員同様打ち合わせに参加し、保育のねらいや個々の配慮等を伝える機会を作っていく必要がある。

・０歳から１歳クラスの子どもたちに、大人がマスクを着用してきた影響で言葉の遅れを感じている、という園があった。保育園だけで補うのは無理だと感じ、保護者会で「お家でたくさん話しかけてあげてください」と話したという。そういった働きかけもあってか現在は家庭でずっと過ごしてきたお子さんに、言葉が追い付いてきたということから、習得する“言葉”にマスクは大きな壁になっていると感じた。

・自園内でも他の保育者に来てもらい保育観察をする時間を作ってきた。一緒に保育をする仲間が、どのような保育（関わり方、言葉かけなど）をしているのだろうかと意識を持って見たり、他のクラスに入ったりし、一緒に振り返り話をする時間を５分でも作ると、お互いの保育が高めていけるのではないか。

・私達研究プロジェクトメンバーだけでなく、保育園ごとにそういった研修ができると自分自身の言葉かけの見直しにもなり良いと思う。

７　私たちが大切にしたい事

今回の事例研究を通して気付いた「保育者が大切にしていきたい事は何か」を挙げてみたところ、次の３つのカテゴリーに分けることができた。その中から特に大切していきたい事を区内の保育者にわかりやすく伝えていけるよう５つにまとめ、ポスター（図１）を作成した。

【子どもと保育者の関わり】

〇年齢に応じた発達段階を理解し、保育をする。
〇子どもの手本となるように正しい日本語を使う。
〇極力子どもの考え等について否定しない。
〇保育者の意図しない行動をしていても、子どもの気持ちになって 「なぜ？」を考える。
〇子どもの言葉、表情、指差し、目線から、子どもが何を伝えたいかをくみ取り、応答的に関わる。
〇子どもの心情を理解しようとし、受容しようとする気持ちを持つ。
〇保育者がその子の思いを決めつけず、まずは子どもからの言葉（思い）を聞く。
〇子ども自身が主体的に物事を考えられるような働きかけをしていく。
〇子どもの声や考え、気持ちを聴いていく。
〇子どもの心に寄り添う。
〇 “子どもと関わる中で何を大切にしたいか”ということを具体的に言語化する。
〇 （発達段階に合わせて）子どもに伝わりやすい言葉で伝える。

【言葉をかける前に・・・・】

〇子どもの言葉や思いを丁寧に聴くようにしている。
〇子どもが気持ちを伝えあう様子を見守る。
〇子どもが自分で考えて行動できるように、あえて言葉がけをしないで待つ、見守るという関わり方を実践。
〇時には見守り、待つことも大事。

【保育者の連携】

〇個々の特性を理解して職員間で共通認識を持つ。

〇保育者同士で子どもの姿やかかわりを共有していく。

〇保育者それぞれの考えや思いがあり、それらを話し合うことが大切。

〇共通の認識で子どもの成長を援助できるような関係性を築いていく。

図１ポスター

８　保育の質の向上プロジェクト　参加者の感想

・自分の言葉かけを深く考えるようになった。
・改めて言葉の大切さに気がついた。
・日々忙しくて、今まで自分の保育を振り返るチャンスやゆとりがなかった。
・今後、保育を語る場面を、クラスでも作っていきたい。
・同じ年齢のクラスの人と話せてよかった。
・同じ悩みを共有できた。
・こうしたら良いなど、他の人の意見を具体的に聞けて勉強になった。
・保育を振り返り、こんな言葉かけがいいと勉強になった。
・言葉かけの引き出しが増えた。
・事例を集めて話し合うことで気づくことがあった。
・他園の様子を見て自分の声の大きさや言葉かけが多いことに気づいた。
・個人だけではなく、園としての保育の底上げを図る機会になった。
・他のグループを見て、いろいろな保育観があった。
・いろいろな保育を見て学んだことを自分の園に返していきたい。
・言葉を何気なく使っていたが、意識して使うようになった。

9　おわりに

保育のなかの言葉とは

保育の質の向上を図るためには、様々な観点から取り組むことが必要であるが、本研究が取り組んだのは、保育者の言葉かけの実践的研究である。

日々の生活や保育において、保育者は、たくさんの言葉を使っている。「おはよう」「さようなら」の挨拶、基本的生活習慣のための躾、安全や集団ルールを教える、遊びや活動を促す場面等々で。絵本の読み聞かせは、言葉と絵と肉声で演じられる。保育者と子どもとのコミュニケーションでは言葉のやりとりも行われる。なかには、無言のボディランゲージもある。これも保育者が発する言葉である。

子どもに対する影響という点でさほど意識されずに使われていることが多いのは、大人同士の言葉のやりとりではないだろうか。日々子どもの前で行われている。

子どもは大好きな保育者の言葉を、空気と同じように吸収している
思いやりのある暖かい言葉によって、暖かい雰囲気が醸し出される。

言葉かけは援助方法である

言葉かけは、保育の中でよく使われている方法である。言葉がけや言葉掛けという言い方もある。本研究では、言葉かけ、言葉がけを使うことにした。この研究グループの中では、子どもを人として尊重する、子どもを主体として保育をするという姿勢で一致していたことを反映させている。

保育者の言葉かけは、保育の計画性と関係している。子どもの興味や願いを受け止めて、主体性を育むことを大切にし、発達段階や発達過程を考慮に入れ、援助方法として意識し、言葉かけの創意工夫を行う必要がある。言葉かけを、子どもを主体として工夫された援助方法となるよう意識し、子どもの成長に生かされるよう改善と工夫が重ねられることが期待される。

子どもへの影響が意識されない言葉遣いが日常化してしまうことは避けたい。保育者の言葉は、子どものモデルにもなるということを意識したい。

「子どもの心を大切にする言葉かけ」を研究テーマにして

「子どもの心を大切にする言葉かけ」という言葉は、研究計画のテーマとして最初から決められていたわけではない。事例を出し合い、意見を交換しながらグループ研究を進めるうちに、共通に目指すところとして、出来上がっていったものである。研究に参加された方々は、5年～16年の経験豊富な保育士であり、それぞれが保育の中で大切にして実践してきた成果と言ってよいだろう。

「子どもの心を大切にする言葉かけ」は、ポスターの標語として保育の現場に送り出されること

になった。研究会内に担当グループを作って、ポスターに入れる言葉が事例から選ばれ、デザイン制作が施された、何もかも手作りである（図1参照）。

日々の保育の場は多忙である。目の届くところにおいていただけるよう事務局のアイデアで、小型にし、水に濡れてもよいようにラミネート・カバーされている。事務局の担当者二人の豊富な保育士経験が生かされたものである。

研究する、協働する、成果を実践の場に返す

今回の研究は、港区による保育の質の向上プロジェクトとして、その核となる中堅層の資質・能力の向上を目指すことを目標として計画された。そのためには、中堅層の何を伸ばすべきか、と考えた。結果として、これからの保育の現場において保育の質の向上のために指導的役割を果たそうという意欲と関心を伸ばし自信を高める、保育の場にふさわしい、客観性を持つ課題解決方法を学ぶ、あくまで成果を現場に返すという実践的研究であることを目指すことにし、以下のような計画を立てた。

- 研究方1法は事例研究を持ち寄り討議する。
- 全体会で発表する。
- 上記の成果を報告書にまとめ、保育の場で生かせるようなポスターを作成する。

方法としては、他者の意見を聞く、他者にわかるように伝える、意見を出し合う、グループの成果をまとめ、研究全体の成果をまとめるというように、指導的役割を果たす力や協働性を伸ばす経験づくりに配慮した。いずれの経験も、これからの保育の現場で発揮してほしい力である。グループ研究では、事務局であり先輩保育士である２名にアドバイサー役となってもらった。

このような研究プロジェクトでは、参加者の主体性の発揮が鍵である。研究会が進行してきた頃、自らの言葉かけを振り返ることが大事ではないかということから、他園の実践観察する機会が提案された。その成果が報告書に載せられているので、是非お読みいただきますように。

他園の観察は、自らの保育の振り返りにつながり、保育の質の向上につながる、実践的ヒントを得る機会となること、また「気づく」という学びのスタートづくりにつながっている。

研究グループを中心とする研究会では、参加者は話し合うことを楽しんでいる様子が見られ、積極的に意見が出されていた。 学ぶ意欲は楽しく関わりあう関係づくりが自然にでき上っていくことが重要である。

それぞれの職場に合う機会づくりへ

「子どもの心を大切にする言葉かけ」の研究はこれで終わりではない。更なる事例を加え研究してほしい。

今回の研究の経験と学びを生かして、それぞれの職場に合う機会が作られることを期待したい。（文責・阿部真美子）

研究アドバイザー

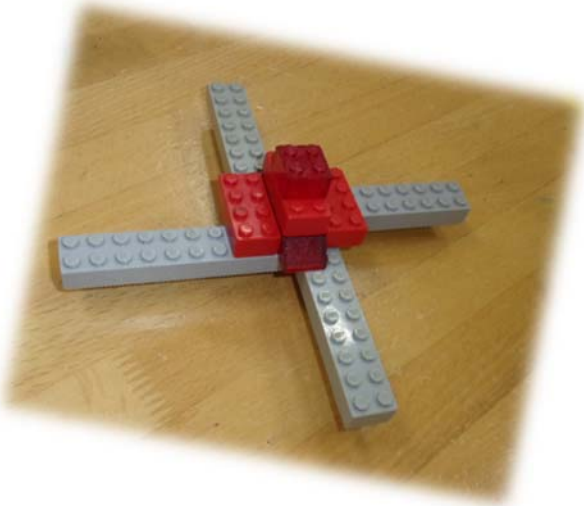
阿部　真美子
聖徳大学教育学部児童学科教授

保育の研究プロジェクト参加園

保育園名	保育園名
麻布保育園	西麻布保育園
白金保育園	芝保育園
青山保育園	高輪保育園
こうなん保育園	本村保育園
◎飯倉保育園	赤坂保育園
◎南麻布保育園	芝公園保育園
◎伊皿子坂保育園	台場保育園
南青山保育園	

◎　研究リーダー

【編集後記】
私たちの保育クレド（信条）
”子どもの心を大切にする”保育者であるために日々学ぶ”
　この研究プロジェクト（2022 年度）から、子どもの心を大切にする保育園が増えることを期待しています！



令和4年度港区保育の質の向上のための研究プロジェクト報告書
令和5年2月

事務局　港区子ども家庭支援部保育政策課保育指導係